第21回伊参スタジオ映画祭　応募作品

エゴイスト

桐乃さち

あらすじ

出版社に勤める夏目光莉は、望まぬ妊娠をしてしまう。恋人の田中英二は産んで欲しいと言うが、光莉は決心がつかない。

女性の子供に対する考えを特集する「エゴイストな女達」と言う記事のインタビューで、様々な女性の声を聞く。

母性本能に目覚め妊娠したものの死産してしまい、しかしそれで仕事を続けられると安心してしまったと涙する女性。人と関わるのが苦手で、子供が産まれても上手くやって行く自信が無いと語る女性。

子供を産んで欲しいと食い下がる田中に、光莉は誰にも言っていなかった過去を話す。それは、母が育児ノイローゼで自死したことだった。光莉は、自分のせいで母が死を選んだことを知り、深い孤独と絶望の中に生きてきたのだった。

光莉は過去の自分と向き合い、堕胎手術を決める。麻酔が効いてきた時、目の前に優しかった母の姿が浮かび上がる。

登場人物表

夏目光莉（２５）	株式会社東栄出版　記者
夏目光莉（回想・１５）	中学生
田中英二（３０）	光莉の恋人
宮前桃子（２９）	専業主婦
戸村千夏（３５）	メーカー勤務
一色彩香（３９）	フリーライター
夏目光司（回想・４９）（５９）	光莉の父
三井五郎（５３）	株式会社東栄出版　記者
夏目恵梨（回想・３２）	光莉の母
親戚の女性	
産婦人科　医師	
産婦人科　受付の女性	
産婦人科　看護師	
事務の女性	

○海　浜辺（朝）
まだ、日の昇りきっていない薄暗い海。
お腹の大きい夏目恵梨（３２）が、砂浜にある椅子に座っている。恵梨、カンバスに向かって、クレヨンで絵を描いている。恵梨、お腹を撫で、鼻歌を歌っている。

○メインタイトル「エゴイスト」

○東栄出版　全景
ガラス張りのオフィスビル。
「株式会社東映出版」と書かれた看板。

○同　会議室
三脚で固定されたカメラがある。
その前に、戸村千夏（３５）が座っている。
千夏「戸村千夏、３５歳です。食品メーカーの企画部で働いています。次々と大きな案件を任されていて、脳内の９０％は仕事が占めていますね」
千夏の向かい側に、夏目光莉（２５）が座っている。
光莉「ご結婚は？」
千夏「８年前に同僚と結婚しました。ただ、彼はメンタル面の病気になってしまって、今は休職しています。彼には、このまま仕事を辞めて主夫になってもいいよって言ってます」
光莉「ご夫婦で、お子さんの事を話し合われたりしますか？」
千夏「はい、時々。彼は、今は自分の事で精一杯で、子供を持つことは考えられないって言ってますね」
光莉「戸村さんは？」
千夏「自分の子供はもちろん可愛いと思うけど、それ以上に仕事が好きなんですよね」
光莉「ではご夫婦共にお子さんは持たれない方針と言うことですね」

千夏「いえ……。実は新婚の時に、何が何でも子供が欲しいって気持ちになったんです。あれが、母性本能ってやつなんですかね。その時、すぐに妊娠しました。だけど、死産してしまって」

千夏、鼻をすすって、涙ぐむ。

光莉「大丈夫ですか？」

千夏「いえ、違うんです。私、その時にほっとしたんです……。あぁ、これで仕事を続けられる。それが自分の本音なんだって。皮肉ですよね。子供の命と引き換えにやっと分かるなんて……」

○同　オフィス

乱雑にデスクが並んでいる。

光莉、栄養補助クッキーをくわえて、パソコンでインタビュー記事を書いている。

「子供のいない人生」「産むことを決断出来ない私達」等の本が積み上がっている。

傍らには「エゴイストな女達」と書かれた記事。記事には「子供が欲しくない訳じゃないんです。だけど周りの空気に流されて産むのは嫌なんです」「『子供が欲しい』って心の底から思えない自分は、女として未完成なんでしょうか？」等のインタビュー記事が掲載されている。

三井五郎（５３）がやって来る。

三井「おぅ、夏目。当たってるな、エゴイストな女達。反響、すごいんだって？」

光莉「どうも」

三井、パソコンを覗き込む。

三井「仕事第一で子供を持つ暇がない、か。今の時代、みんなそうなのかねぇ」

光莉「みんなじゃないですよ。そんな単純なものじゃありません」

三井「あん？」

光莉「世の中、多様性多様性って叫ばれているけど、実際は子供を

産まない女に対して世間の風は冷たいんです。子供を産んでいない女性は一人前じゃないとか、大人になり切れていないとか」
光莉、バチバチとキーボードを叩いている。
光莉「本当なら、産む人生も産まない人生も、平等に尊重されていはずなのに」
三井「子供がいなくなったら困るだろうが」
光莉「国は少子化問題の対策って言ったらすぐお金を持ち出すじゃないですか。私、あれってナンセンスだと思うんですよね。本気で産みたかったら、お金が無くてもなんでも、産むでしょう」
三井「おいおい、問題発言……」
光莉「例え出産・育児の費用が0になっても、産みたくないって言う女性も多いんです。どうしてか、分かりますか？」
三井「いや？」
光莉「私はその理由を解き明かしたいんです」
三井「母性本能ってもんは消えちまったのかね？」
光莉「母性を神格化し過ぎじゃないですか？　反吐が出そう」
光莉、三井を睨みつける。
三井「古い人間ですいませーん」
三井、手を振って立ち去る。
光莉、クッキーを噛みちぎる。

○電車　車内（夜）
満員電車。光莉、吊革に捕まって揺れている。光莉、ハンカチを口に当てて苦悶の表情。電車が止まる。
光莉「すみません、降ります！」
光莉、人を押しのけて電車から降りる。

○駅　ホーム　女子トイレ（夜）
光莉、便器に顔をつけて嘔吐している。

○同　洗面所（夜）
光莉、うがいをしている。光莉、指を折って数える。
光莉「１、２……」
光莉、はっと目を見開く。水が勢いよく出ている。

○ドラッグストア　店内（夜）
光莉、コンドーム等が置いてある棚の前に立っている。妊娠検査薬がある。
光莉、大きく深呼吸をして、妊娠検査薬を掴む。

○光莉の自宅　玄関　中（夜）
マンションの一室。
光莉、靴を脱いでいる。田中英二（３０）がやって来る。
田中「遅かったね、仕事？」
光莉「ごめん、終電逃してタクシーで帰って来た」
光莉、バッグから妊娠検査薬を取り出す。
田中「……わー、えっと」
光莉「生理来てない。最近、不順だったから気づかなかった」
田中「それって……」
光莉「今からこれ、やってみるから」
田中「えっ、今！？」
光莉「早い方がいいでしょ」
光莉、トイレに向かって歩いて行く。

○同　リビング（夜）
光莉と田中、向かい合って座っている。
テーブルの上には、妊娠検査薬。光莉、頭を抱えている。
光莉「なんで……」
田中「まぁ、ゴムも１００％じゃないって言うしな」
光莉「……」

田中「付き合って３年、同棲して１年か。まぁ、いい頃合いじゃない？」
光莉「どういうこと？」
田中「結婚」
光莉「それって、産むってこと？」
田中「え！？」
光莉「え！？」
　お互いに目を丸くする。
光莉「いや、だって」
田中「え、俺の子なんだよね！？」
　光莉、田中に向かって妊娠検査薬を投げつける。
田中「おっとと！」
　田中、妊娠検査薬をキャッチして大切そうに撫でる。
光莉「汚な……」
田中「ばか！　これはその子がこの世に存在している初めての証だろ！？」
光莉「……」
田中「腹が出て来る前に式、やっちゃわないとな。あ、うちの両親への挨拶どうする？　光莉のお父さんにも会いに行かないと」
光莉「待って待って。ちょっと待って」
田中「その前にまず仕事か。光莉の会社は産休・育休ばっちりだろ？　俺のとこはどうだったかな……」
光莉「待ってってば！　私、子供産むなんて考えてない！」
田中「これまではそうだったとしても、出来ちゃったんだから考えないと。俺じゃ嫌なの？」
光莉「嫌じゃないけど……」
　田中、スマホで何か検索し始める。
光莉「何やってんの？」
田中「婚約指輪。どこのがいいとかある？」
光莉「やめてよ！　ごめん、ほんと無理」

光莉、ふらふらと部屋から出て行く。

○同　寝室（夜）

光莉、布団にくるまって丸くなっている。田中、部屋に入って来る。

田中「とにかくさ、まずは病院行ってみようよ」

光莉「……」

田中「おーい、光莉ちゃん」

光莉、黙っている。

○東栄出版　会議室

宮前桃子（２９）が座っている。光莉、カメラを設置している。光莉、カメラを見つめてぼんやりとする。

桃子「あの……？」

光莉「あ、すみません！　始めましょうか」

光莉、桃子の向かい側に座る。

光莉「まずはお名前、年齢、職業からいいですか？」

桃子「宮前桃子です。２９歳、専業主婦です」

光莉「宮前さんは、ご結婚されてるんですよね」

桃子「はい。夫とは職場で知り合って、３年前に結婚しました。今は仕事を辞めて家の事をしています。夏目さんみたいにばりばり仕事してらっしゃる方からすると、つまらない人生だと思うんですけど」

光莉「何言ってるんですか。つまらない人生だと思ってたら、わざわざ取材しようなんて思わないですよ」

光莉と桃子、笑い合う。

光莉「じゃあ、早速本題ですが、お子さんを持たれるつもりはないと言うことですが……」

桃子「私、子供の頃から人と話すのが苦手だったんです。仕事は受付をやっていましたけど、毎日クタクタで……。養ってくれてい

る夫には、本当に感謝しています。もし子供が産まれても、ママ友とのお付き合いとかを考えると……」
光莉「（頷く）」
桃子「何より、子供と上手くやれるのかが不安なんですよね。子供とは言え、一人の人間ですもんね。一度産んでしまったら、どんなに大変でも、もうお腹には戻せないし」
光莉「親子にも相性ってありますよね」
桃子「でも、夫は子供を欲しがってるんですよね」
光莉「！　旦那さんとは、どう言う話し合いを？」
桃子「ごまかしごまかし、夫婦生活やってますね。３５歳までには考えるからって言い訳しています。夫は優しいから、今は待ってくれてます。でも私は子供なんて……」
光莉「いいですよ、何でも話して下さい。今日はタブーは無し。とことんエゴイストになろうって言う企画ですから」
桃子「子供は欲しくないです。今の生活を変えたくない。……いっそ、不妊症だったらいいのに」
光莉、虚を突かれたように黙り込む。

○同　出入口　前（夕）
光莉、桃子が立っている。
光莉「今日は、ありがとうございました」
桃子「こちらこそ。最初は緊張してたんですけど、話してるうちに、なんだかすっきりしてきました」
光莉「そうですか」
桃子「こういうこと、友達に話しても理解してもらえないんです。気が付いたら、周りには子供が欲しいか、欲しくても産めない子ばかりになってて。みんな言うんですよね。そのうち気が変わるよ、とか、絶対欲しくなるよって」
光莉「……」
桃子「その度に子供が欲しくない自分はおかしいんだって、自分を

責めちゃうんですよ」
桃子、光莉に笑いかける。
桃子「自分はこのままでいいのかもって。気持ちが楽になりました。今日は夏目さんに会えて良かったです」
光莉と桃子、笑い合う。

○今村総合病院　診療室
光莉が医師の前に座っている。拡大した超音波写真がある。
医師「今、二ヵ月ですね」
光莉、ぼんやりと超音波写真を見つめる。
医師「これ、分かりますか？　この小さい点が赤ちゃんです」
光莉、お腹をさする。
光莉「あの、もし、おろす場合って、いつまでなら大丈夫なんでしたっけ……」
医師「中絶をご希望ですか？」
光莉「……」
医師「２２週未満だったら手術出来ることになってます。ただ、妊娠中期に入ると入院になるし体への負担も大きいから……。堕胎されるならなるべく早い方がいいですよ」

○同　受付
光莉、受付の女性、「人工妊娠中絶に関する同意書」をカウンターに置く。
女性「手術の予約、していかれますか？」
光莉「あの」
女性「一日も早い方がよろしいですよ」
光莉「はい……」
光莉、書類をバッグに仕舞う。

○公園

ブランコで遊んでいる母親と幼い娘。
光莉、ぼんやりと見つめる。

○光莉の自宅　リビング（夜）
光莉と田中、向かい合って座っている。
テーブルに「人工妊娠中絶に関する同意書」が置いてある。
田中「まじで、産みたくないんだ……」
光莉「うん」
田中「理由は？　仕事？」
光莉「それもあるけど、母親になる自信がない」
田中「それは最初は、誰だってそうだって」
光莉「言ったことあるでしょ？　私の母、私が赤ん坊の時に亡くなったって」
田中「それは、聞いたけど」
光莉「母親の愛情を知らない人間が、子供を愛せると思う？」
田中「そういう家庭で育っても、子供を産んでる人ってたくさんいるよ？」
光莉「私の記事、知ってるでしょ。エゴイストな女達」
田中「うん」
光莉「いろんな女性にインタビューした。子供がいる女性にもたくさん話を聞いたけど、心の底から子供を産んで良かったって思っている女性だけじゃないよ」
田中「……」
光莉「産んでしまったからには一生懸命育てるけど、もし生まれ変わったら子供がいない人生を歩んでみたいって言ってる人もいた」
田中「それは、極端な例だろ？」
光莉「言えないけど心の中でそう思っている人はたくさんいると思う。だって、子供を産んで後悔しているなんてタブーでしょ？」
田中「光莉がそうなるとは限らないだろ」
光莉「自分で分かるの。子供苦手だし」

田中「俺だって手伝うし」
光莉「誰が手伝ってくれても、嫌なものは嫌なの」
田中「やめろよ！　聞こえるだろ」
光莉「まだ意志なんかないよ。ただの細胞」
田中「育てれば人間になるんだよ」
光莉「だから、早く決めないと」
田中「俺が父親になる権利は？」
光莉「私の産みたくない気持ちは？」
　電話が鳴る。光莉、スマホを取り出して耳に当てる。
光莉「はい」
夏目の声「もしもし、光莉か？　お父さんだけど」
光莉「……はい」
夏目の声「実はな、実家にあった蔵、あるだろ。あれ、取り壊すことにしたんだ。何か捨てたくない物があったら、今のうちに持って行ってくれないか？」
光莉「……分かりました。仕事の合間に行きます」
夏目の声「鍵、いつもの所にあるから。お父さんも行こうか？」
光莉「いえ、大丈夫です。それじゃ」
　光莉、電話を切る。
田中「仕事？」
光莉「父親。実家の蔵を取り壊すって。週末にでも行ってくる」
田中「俺も行こうか？」
光莉「いいよ。大して荷物もないし」
田中「って言うか、お父さんに挨拶したいんだけど」
光莉「やめてよ。人の話聞いてる？　私は産みたくないって言ってるの。避妊を失敗したのは私の責任もあるけど、それとこれとは別問題」
　光莉、書類を指差す。
光莉「先生から、堕胎するなら早いうちって言われてるから」
田中「……無理」

光莉「遅くなればなるほどダメージを受けるのは私の体なの」
田中「男がおろしてくれって言うとひどい奴になるけど、反対は許されるのか？」
光莉「だからこうして話し合いしてる」
田中「これは話し合いなんかじゃない。光莉はもう決めてるじゃないか」
光莉、黙って部屋を出て行く。

○東栄出版　会議室
三脚で固定されたカメラがある。その前に、一色彩香（３９）が座っている。光莉、向かい側に立っている。
彩香「一色彩香です。３９歳独身です。フリーライターをやってます」
光莉「じゃあ早速だけど、子供に関して、聞かせていただけますか？」
彩香、頷く。
彩香「これまで、子供の事を一度も考えたことが無いって言ったら、嘘になります。もう３９ですから」
光莉「（頷く）」
彩香「３０代に入ってから、私も相当迷いました。誰でもいいから結婚して子供を産んでおいた方がいいんじゃないかって。女性にはタイムリミットがありますもんね」
光莉「……はい」
彩香「年を取ってから、後悔したくないなって。けど、子供を愛せないなら、産まない方がましだと思ったんです」
光莉、はっとして彩香を見つめる。
光莉「……と言うと？」
彩香「子供を産む能力と、育てる能力って別ですよね。心の底から望んで子育てをするのでなければ、親も、子供も不幸になると思ったんです」

光莉「彩香さんは、ご自分がそうなると？」
彩香「えぇ、そうですね……」
光莉「そういう風に思われたきっかけって、何かあるんでしょうか？」
彩香「家庭環境のせいかもしれません。うちは父親が古いタイプで、母親が仕事をするのを許さなかったんです。母は働きたがってたけど」
光莉「男尊女卑家庭だったんですね」
彩香「母はよく、『子供がいなければ離婚するのに』って言ってました。その度に、無力感に襲われましたね。子供を産んだからって、全ての女性が無条件に幸せになるとは、思えないです」
光莉、目を漂わせる。
彩香「やっぱり、母親が幸せじゃないと……。いくら制度や医療が進歩しても、子供が求めるのは母親からの安定した愛情です。それは、いつの時代でも同じですよね」
光莉、じっと宙を見つめる。

○夏目家　蔵の前
古びた大きな蔵。光莉、立っている。

○同　蔵の中
埃っぽく、薄暗い。光莉、電気を点ける。
蔵の隅に、机、古びたイーゼル、乾いた絵の具、カンバス等がある。机の上には４８色のクレヨン。黄色のクレヨンだけが極端に小さい。
光莉、黄色のクレヨンを手に取る。
扉が開く音。光莉、びくっとして振り返る。
夏目光司（５９）が立っている。
夏目の声「光莉」
光莉「お父さん、来てたの？」

夏目「何か、手伝う事あるかと思ってな」
光莉「……別に良かったのに」
夏目「懐かしいな」
夏目、カンバスを手に取る。
光莉「この辺の物、持って行ってもいい？」
夏目「いいけど、一人で運べるか？」
光莉「宅配業者に頼むから」
光莉、カンバスや絵の具をまとめ始める。
夏目「ここももう８０年近く経つからな。地震でも起こったら危ないと思って」
光莉「うん」
夏目「母屋もそのうち、解体することになると思うから」
光莉「はい」
夏目「どうだ、あっちでお茶でも」
光莉「ごめん。この後仕事あるから」
夏目、気まずそうに光莉を見つめる。光莉、黙々と片付けている。夏目、諦めたように蔵を出て行く。
光莉、カンバスを見つめる。
制服姿の光莉（１５）が、カンバスに向かって、絵の具で絵を描いている姿が浮かぶ。
光莉、蔵を飛び出す。

○同　居間（夕）
仏壇のある、昔ながらの和室。夏目、お茶を飲んでいる。
光莉が入って来る。
夏目「おぅ。終わったのか？」
光莉「私、お父さんの事許してないから」
夏目「……」
光莉「お母さんの事、どうして本当の事教えてくれなかったの？」
夏目「光莉……」

光莉「私、許してないから！」
光莉、足早に部屋を出て行く。

○同　玄関　外（夕）
光莉、家から走り出て来る。夏目、走って追いかけてくる。
夏目「光莉！」
夏目、菓子の袋を持っている。
夏目「これ、好きだっただろ」
光莉、夏目の足を見つめる。右足だけサンダルを履き、左足は裸足。光莉、唇を噛んで袋を受け取る。

○光莉の自宅　リビング（夜）
光莉と田中、向かい合って座っている。
テーブルに「人工妊娠中絶に関する同意書」が置いてある。
田中「あのさ、ちょっと聞いてもいい？」
光莉「うん」
田中「光莉は、このまま俺と付き合っても、結婚もしないし、子供も持たないつもり？」
光莉「結婚はしてもいいけど、子供は無理」
田中「……その考えはどうしても変わらないの」
光莉「変わらないと思う」
田中「俺が、それなら別れたいって言っても？」
光莉、田中にペンを渡す。
田中、ペンを取り、書類を書こうとする。が、手が止まる。
田中「書きたくないよ。だって……。なぁ、産むだけ産んでくれないかな」
光莉「誰が育てるの」
田中「俺、育てるよ。両親にも頼んで、手伝ってもらうし」
光莉「ふざけないで」
光莉、黙って涙を流す。

田中「どうして、泣くの……」
光莉「子供の事は考えてないんだね」
田中「え？」
光莉「母親に望まれずに産まれてくる子供の気持ちなんて、全然考えてないじゃない。子供が必要とするのは、他の誰でもない。母親の愛情なの」
田中「……」
光莉「それがもらえない子供の気持ち、英二に分かるの？」
光莉、書類を持って部屋を出て行く。

○同　寝室（夜）
光莉、衣類をバッグに詰めている。田中、入って来る。
田中「光莉……？」
光莉「しばらくホテルに泊まる。残りの荷物は今度取りに来るから」
田中「ちょっと、光莉！？」
光莉「出て行く。別れよう」

○同　玄関　中（夜）
光莉、靴を履いている。
田中「光莉、待てよ！」
田中、光莉の手を掴む。光莉、振り払う。
光莉「英二に話しても、分かってもらえると思えない」
光莉、出て行く。田中、立ちすくむ。

○ビジネスホテル　部屋（夜）
机や椅子等がある、狭い部屋。
光莉、ベッドに寝転がり、天井を見つめている。光莉、目を瞑る。

○（回想）夏目家　居間

光莉（１５）、夏目（４９）、数人の親戚が集まって食事をしている。赤ん坊を抱いた女性がいる。皆、赤ん坊をあやしたりしている。光莉、赤ん坊をじっと見つめている。

女性「光莉ちゃんも抱っこしてみる？」

光莉「私、いい。なんか、怖くて」

女性「最初は怖いよね。でもこう見えても赤ちゃんって丈夫なのよ」

女性、光莉に赤ん坊を渡す。光莉、ぎこちなく抱く。

光莉「わぁ……。かわいい」

女性「光莉ちゃん、上手」

光莉「えへへ」

光莉、赤ん坊を見つめる。

○（フラッシュ）夏目家　居間

天井。揺れるベッドメリー。赤ん坊の泣き声。赤ん坊の手。

○（回想）夏目家　居間

光莉、赤ん坊を抱っこしている。赤ん坊が激しく泣き始める。

女性「あらあら、どうしたのかな？」

真っ赤になって泣き続ける赤ん坊。

○（フラッシュ）夏目家　居間

声を枯らして泣いている赤ん坊の声。ベビーベッドの柵越しに見える部屋。おむつやおもちゃが散らかっている。

○（回想）夏目家　居間

光莉、赤ん坊を抱いている。赤ん坊、反り繰り返って泣いている。光莉、後ずさる。光莉、手が震えている。

○（フラッシュ）夏目家　居間

赤ん坊の泣き声。部屋の隅で、夏目恵梨（３２）が手で顔を覆って泣いている。

○（回想）夏目家　居間
赤ん坊を抱いている光莉。光莉、後ずさり、泣いている赤ん坊から手を離す。赤ん坊が床に落ちる。
女性「きゃあ！」
光莉、驚いて尻もちをつく。
夏目「どうした！？」
床に転がり、泣き叫ぶ赤ん坊。騒然とする一同。

○元のビジネスホテル　部屋（夜）
光莉、ベッドに寝転がり、静かに涙を流している。

○今村総合病院　前（朝）
タクシーが止まる。光莉が降りて来る。
病院の前に、田中が立っている。光莉と田中、見つめ合う。
光莉「何してるの？」
田中「電話に出ないから。ここで見張ってた」
光莉「会社は？」
田中「有給取った」
光莉「……馬鹿じゃない」
田中「頼む、光莉。産んで欲しい」
田中、ポケットから小さな箱を取り出す。田中、箱を開ける。
ダイヤの指輪が入っている。
光莉「どうして……」
田中「俺の子供だからだよ」
光莉「……ついて来て欲しい所があるの」

○夏目家　前の道（朝）
タクシーが止まる。
光莉、田中が降りて来る。田中、家を見上げる。

○同　蔵の前（朝）
光莉と田中、立っている。光莉、錠前を外して、扉を開ける。

○同　蔵の中（朝）
光莉と田中、入る。光莉、電気を点ける。
田中「ここが、取り壊されるって言う蔵？」
田中、奥にあるイーゼルやカンバスに気が付く。
光莉「ここね、私の秘密の場所なの」
光莉、机の前に椅子を二つ出す。
光莉「座ってくれる？」
光莉と田中、向かい合って座る。
光莉、クレヨンを触る。短い黄色のクレヨン。
光莉「中学生ぐらいまで、毎日、ここで絵を描いてたの」
田中「へぇ、光莉、絵なんて描けるんだ」
光莉「お母さんがね、絵が好きで、毎日、絵を描いてたんだって。だから私も……」
光莉、一瞬目を瞑って、開ける。
光莉「夏目光莉。２５歳。独身です」
田中「何だよ、急に」
光莉「私の母は、私が赤ん坊の時に死んでしまいました。育児ノイローゼでした」
田中「え……？」
光莉「家ではなぜか、お母さんのことは聞いちゃいけない雰囲気があって」
田中「……うん」
光莉「お母さんは病気で死んだとだけ聞かされてた」
田中「うん」
光莉「昔、親戚に子供が産まれたことがあるの。赤ちゃんを抱っこさせてもらってたら、急に変なことを思い出したの」
田中「……うん」

光莉「赤ん坊の私がベッドで寝てて、泣いてて。隣に私より泣いてる女の人がいるの。私はその人に気づいて欲しいのに、いくら泣いても届かないの。私、すごく怖くなって……」
田中「……」
光莉「学校で、母子手帳を持って来ましょうって言う宿題が出たの」
田中「母子手帳？」
光莉「親に、自分が生まれた時のことを聞いてみましょうって。家はお母さんの事は話題に出せない雰囲気があったから、私は勝手に母子手帳を探すことにしたの」
光莉、棚から古い母子手帳を取り出して田中に渡す。
田中「見てもいいの？」
光莉「（頷く）」
田中、恐る恐るページを開く。
「母親自身の記録」と書かれた箇所に、「やっと会えた。髪の毛ふさふさ。かわいい女の子の赤ちゃん」と書かれている。
田中、ページをめくる。田中、顔が硬直する。
「もう限界」「眠れない」「自分が選んだことなのに耐えられない」「泣きやんでくれない」等の言葉が並んでいる。
田中「だからって、自殺したって言う訳じゃ……」
光莉「おじいちゃんを問い詰めたら教えてくれた。お母さん、赤ん坊の私を家に残して、海で溺れて死んでいる所が見つかったって。遺書もあったって。光莉をよろしくお願いしますって」
田中「……」
光莉「お父さんにどうしてそんなことになったのか問い詰めたけど教えてくれなかった。それから気まずくなって、１８になって、すぐ家を出たけど」
光莉、短い黄色のクレヨンを持つ。
光莉「お母さんが絵を描いてたって知って、私も毎日絵を描いてた。絵を描いている時だけ、お母さんが近くにいてくれてる気がしてたの。だけど、あの時、分かった。どれだけ絵を描いたって、お

母さんは私の近くになんか来てくれないんだって。どこにもいないんだって……」

光莉、嗚咽する。田中、光莉を抱き締める。

光莉「私のせいでお母さんが死んだって知ってから、私、どうしても自分の事……。だから、だから私……」

田中「もういいよ、光莉。もういい」

光莉、田中の腕の中で、苦しそうに嗚咽をもらす。

○今村総合病院　前

光莉と田中、立っている。

田中「本当についていなくていいの？」

光莉「うん」

光莉、病院に入ろうとする。

田中「光莉！」

田中、光莉の手を掴む。

田中「光莉のせいじゃないよ」

光莉、微笑んで病院へ入って行く。

○同　待合室

光莉、椅子に座っている。

お腹の大きい妊婦が数人いる。幼い子供が、走ったり、床に座り込んで絵を描いたりしている。光莉の足元に、黄色のクレヨンが転がって来る。

光莉、クレヨンを拾う。幼い女の子がやって来る。光莉、女の子にクレヨンを手渡す。女の子、笑顔で走り去る。

○同　施術室

いかめしい機械の並ぶ部屋。

光莉、手術台に寝転がる。看護師が注射を持ってやって来る。

看護師「では、麻酔しますね。ご気分、大丈夫ですか？」

光莉「はい。お願いします」
看護師、光莉の腕に注射をする。
看護師「ゆっくり１０秒数えて下さい。深呼吸して」
光莉、深く深呼吸をする。
光莉「１、２、３……」
光莉、目を瞑る。
光莉「４、５……」
光莉、右手を見る。視界がぼやける。指に、黄色のクレヨンがついている。

○（フラッシュ）海　浜辺（夕）
夕日が沈み、海がオレンジ色に染まっている。
カンバスに、赤ん坊の絵が描かれている。

○元の今村総合病院　産婦人科　施術室
光莉、目を見開く。

○（フラッシュ）海　浜辺（夕）
恵梨が赤ん坊を抱っこしている。
恵梨「光莉」
笑う赤ん坊。恵梨、赤ん坊の頬を優しく撫でる。

○元の今村総合病院　産婦人科　施術室
光莉、手術台に寝ている。
光莉、看護婦に向かって手を伸ばす。
手が震えて思うように動かせない。光莉、声を出そうとするが、声も出ない。光莉、顔をゆがませる。
光莉、ベッドから転がり落ちる。手術用具が床に飛び散る。
看護婦、驚いて振り返る。
看護婦「夏目さん！？」

光莉、看護婦の服を掴む。

○東栄出版　オフィス（夕）

机が並んでいる。

光莉、パソコンに向かってインタビュー記事をまとめている。

事務の女性が電話を持っている。

女性「夏目さん、お電話です。宮前さんって方から」

光莉「宮前さん？　あ！（電話を取る）もしもし、夏目です」

桃子の声「こんにちは、宮前です」

光莉「こんにちは。どうされました？」

桃子の声「あの、まだインタビューが記事になってないようだったら、お話しておいた方がいいかもって思いまして」

光莉「はい」

桃子の声「実は私、妊活、してみようかと思うんです」

光莉「え！？」

桃子の声「あんなに子供はいらないって言ってたのに、びっくりですよね」

光莉「いえ、でも、何があったんですか？」

○桃子の自宅　台所（夕）

綺麗に片づけられた一戸建て。

調理機器が並ぶ台所。

桃子、料理をしながら、スマホを耳に当てている。

桃子「実は、インタビューを受けたことで、なんだか自信がついたって言うか。これまでちゃんと話したことなかったけど、夫と話してみたんです。子供の事」

桃子、棚の上の結婚式の写真を見つめる。

桃子「私は子供が欲しくない。もしそれが嫌だったら、離婚するって言われても仕方ないと思ってるって」

光莉の声「はい……」

桃子「そうしたら、分かってくれたんです。そんなに嫌なら、やめよう。夫婦二人でも楽しいよって。それを聞いたら私、なんだか急に、この人の子供が産みたいって思えて来て。優柔不断もいいところですよね」
光莉の声「そんな……」

○東栄出版　オフィス（夕）
光莉、電話を耳に当てている。
桃子の声「子供が出来るかどうか分からないけど、どっちの人生でも私、幸せになれるんじゃないかって思えたんです。そういう生き方も、私らしいのかなって。すみません、長々と。夏目さんにはお話しておいた方がいいかと思って」
光莉、笑って頷く。
光莉「ありがとうございます。またお話、聞かせて下さいね」
光莉、静かに受話器を置く。
光莉、立ち上がる。

○同　廊下（夕）
ガラス張りの廊下。
高層ビルが並ぶ風景が一望出来る。光莉、立って外を見ている。光莉、スマホを取り出して、耳に当てる。
田中の声「もしもし」
光莉「英二、私」
田中の声「大丈夫か？」
光莉「うん」
田中の声「……体はどう？」
光莉「大丈夫」
田中の声「無理しないで。今日は家に帰って来るんだろ？」
光莉「うん」
光莉、お腹を触る。

光莉「昨日ね、麻酔で意識が無くなる時に、思い出したの」
田中の声「え？」
光莉「お母さんと海に行ったこと。お母さん、楽しそうに笑ってた。
　あんな時もあったんだね。私、思い出した」
田中の声「……」
光莉「私、産む」
田中の声「え！？」
光莉「急にこの子に会いたいって思ったの。私じゃ上手く育てられ
　ないかもしれない。産むのは私のエゴだと思う。でも、そんなの
　どうでも、何でもいいから、顔が見たいって」
田中の声「え！？　じゃあ、まだいるの！？　お腹に！？」
光莉「いるよ」
田中の声「嘘！」
光莉「本当」
田中の声「本当の本当の本当に……」
光莉「本当だよ。帰ってからゆっくり話そう」
　光莉、電話を切ろうとする。
田中の声「待って！　光莉、ありがとう」
光莉「私も……。ありがとう」
　光莉、電話を切る、
　窓の外を見る。鮮やかな夕日。
　声を出さずに「お母さん」と呟く。

了